

百濟康義君を偲んで

井ノ口泰淳

百濟康義君（君付けで呼ばせていただきたい）との四十年に垂んとする長い交誼を思えば感無量のものがある。その間、随分と親しく日々接触した時期もあるが、近年、殊に私が龍谷大学を定年退職して（平成二年三月）以後は次第に疎遠となり、その後百濟君が健康を害されてからは益々面晤する機会が少なくなったことは誠に残念であった。二十数歳年長の私が後に残り、君が先立とうとは夢にも思わぬことであった。

百濟君は昭和三十九年四月、龍谷大学文学部に入学し、翌年二回生の時、一般教育課程の仏教教学を履修した。その講義を担当した私と縁が結ばれて以来、君は大学院博士課程を修了するまで、一貫して私の指導下の学生であった。

百濟君が文学部を卒業し、大学院修士課程へ入学したその時期（昭和四十三年四月以降）私は当時のドイツ民主共和国科学アカデミー東方学研究所を主たる受け入れ先として、その他のヨーロッパ各国における仏教研究の状況を視察・勉強する為、渡欧した。その一ヶ年に及ぶ不在中の研究室の管理・私との連絡等の雑事の処理はすべて百濟君の好意に頼った。その年の七月頃、私の滞在していた東ベルリンの研究所を、当時西ドイツのハンブルグ大学教授であったアンネマリー・フォン・ガビン博士が来訪され、私は初めて教授の面識を得た。教授は当時の東西ドイツを代表する古代トルコ語（ウイグル語）学の権威であった。しかし、私は教授の専門とされる古代トルコ語学については全く知識もなく、唯雑談を交わしたのみであった。その後、帰国して二年ほど経って

から（多分昭和四十六年頃か）、ガバイン教授は京都大学文学部の招聘を受けて京都へ来られ、京大に於いてその専門分野のウイグル語学について講義をされた。その機会をとらえ、私は百濟君を京大へ同行し、教授に紹介し、特にその京大での講義に必ず出席し、且つこれを機会にウイグル語学、ウイグル仏教の研究を専門とするよう半ば懇請し、半ば命令した。そして、君は、その私の指示に従い私の期待に応えてくれた。

百濟君が生涯を通じてこの分野の研究に専念し、多大の業績を挙げるに至ったのは、このガバイン教授との出会いが大きな切っ掛けとなったことは間違いなく、その為に私が少しくお役に立つたかと思うと心うれしい気がする。

この後、ガバイン教授が日本を来訪されることは無かったが、百濟君は度々ドイツを訪れ、ガバイン教授を尋ね親交を重ねたと承知している。

百濟君がその生涯に於いてどのような志を懷いていたかは知る由もないが、残された業績を顧みれば、ウイグル語学・ウイグル仏教の研究がその中心であったことは明らかである。そして、その発足の時点に於いて、私がいささか、君のお役に立ちえたのではないかと懐かしく想い出している。